

# 京のみどり

No.112  
2024秋

特集

## 京都ゆかりの花 キクタニギクの再生へ

— 歴史文化の継承、研究、保全活動 —

訪ねてみよう京の庭

祇園甲部歌舞練場の庭

京のまちに雨庭をつくろう！

伝統的雨庭研究が土木学会論文賞を受賞

— 相国寺枯山水に美しいだけでなく重要な機能を発見！

祇園商店街の懸崖菊飾り(東山区)

# 京都ゆかりの花 キクタニギクの再生へ

## —— 歴史文化の継承、研究、保全活動 ——

野菊キクタニギクをご存知でしょうか。名前の由来となった東山・菊溪では絶滅した花ですが、いま、関連する歴史文化が見直され、遺伝資源を守る観点での研究も進み、注目されています。



- ①市内自生地のキクタニギク (近藤和男氏撮影)
- ②都の福菊の苗圃 ③京都文教小学校の児童の育成 ④京都御苑閑院宮邸跡前での特別展示
- ⑤京都文教高等学校探究ゼミ制作の普及啓発動画が「ネイチャー甲子園」で優秀賞
- ⑥日本新薬(株)山科植物資料館の保全
- ⑦京都府立大学サークル「畑はた」の育成 ⑧円山公園から見た將軍塚、菊溪方面
- ⑨池坊専好次期家元によるキクタニギクを用いたいけばな作品
- ⑩京都伝統文化の森推進協議会の菊溪での活動



国有林歩道の一部が通行止めのため、現在、菊溪に近づきにくくなっています。

菊溪と東山のおよその位置関係

### キクタニギク(菊溪菊)

キク科 多年草

別名 アワコガネギク (泡黄金菊)  
 学名 *Chrysanthemum seticuspe* (広義)  
*C. s. f. boreale* (狭義)  
 環境省レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)  
 京都府レッドリスト 絶滅危惧種  
 分布 日本(本州・九州の一部)、  
 朝鮮半島、中国北部・東北部  
 花期 10月下旬～11月(関西地方)



頭花(乙訓の自然を守る会)



切込みのある葉とつぼみ

### キクタニギクとは

キクタニギクの和名は東山のかつての菊の名所「菊溪」に由来します。しかし、現在、東山では自生が確認できなくなりました。市内・府内の他の自生地も、自然の遷移やシカの食害などにより減っています。絶滅のおそれのある野生生物の現状を報告する京都府レッドリストでは2013年から「絶滅危惧種」にランクされています。

草丈60cmから1.5m程度。葉の色は明るく、葉質は薄く、細長い卵型で4つくらいの切込みが入り、互生します。ふちに鋸歯、両面に細毛があり、少しざらざらします。若葉には爽やかな香りがあります。

晩秋、枝先に10～15mmほどの小さな黄色の頭花をつけ、次々と花を咲かせます。NHK「らんまん」主人公のモデルになった植物学者・牧野富太郎博士は、密集した泡のように黄金色の花が咲くので、「アワコガネギク」と名付けました。現在もこの名で栽培品が流通します。

### 菊溪、菊谷川

菊溪(菊澗、菊ヶ谷、菊の谷)は、東山(華頂山)の山頂、將軍塚標高約210mすぐ下の高台寺山国有林から、西の鴨川に向かって流れる菊谷川の upper 流部です。昔は東山の小河川の洪水がしばしばあり、人々を悩ませるとともに、山裾になだらかな扇状地をつくりました。現在の八坂神社の南から高台寺にかけての地名「下河原」は菊溪などの河原があった名残りです。下河原は江戸時代は社寺の門前町、花街として栄えました。

近代以降は、市街化と洪水対策のための暗渠(トンネル)化が進みました。円山公園の南を通った流れは、下流がほぼ暗渠となり、団栗橋付近で地下の鴨川運河(琵琶湖疏水)に合流します。

### 全国に知られた溪と名水

江戸時代の京都で発刊された名所を紹介する地誌、図会などの多くが菊溪を紹介し、広く全国に知られる要因となりました。例えば、『雍州府志』は、高台寺「十の境」の「一」菊潭水について「山中の溪間に菊多し。深水その間より出づ」とし、その水を飲んで長寿となった僧がいると書いています。同じ頃の『菊苔泥赴』は菊潭水の説明で「菊谷」ともより名をえたりし境地」と「菊谷」の名を記しています。菊の図譜『扶桑百菊譜』には、黄花の菊が高台寺の後山にあり、昔からここが「菊溪」、その水を「菊水」と呼ばれるとします。『都名所図会』は、祇園社南側の牛王地社の東にある名水「菊水の井」の名は、菊澗の下流がそばにあるためと紹介しています。

※1…葉が茎の各節から1枚ずつ方向をたがえて出ること。 ※2…小さな花が集まってつくられる一つの花のような構造。頭状花ともいう。  
 ※3…菊谷川(菊川とも)は、法律上は河川の定義には入らない水路。

## 地誌や図会等に見える菊溪の例

(一部本文と重複します)

### ▶1684年(貞享元)

『雍州府志』(黒田道祐著)  
高台寺十の境「菊潭水」を紹介

### ▶1684年(貞享元)

『菟芸泥赴』(北村季吟著)  
「菊潭水」とともに「菊谷」の名を紹介

### ▶1701年(元禄14)

『洛中洛外大絵図』  
(元禄十四年實測大絵図)  
高台寺付近から清水寺付近からの流れが合流し、建仁寺内を流れ、鴨川に注ぐ様子が描かれる。(地名の記載はなし)

### ▶1736年(享保21)

『扶桑百菊譜』(児素仙著)  
第二巻凡例に「菊溪」の地名。

### ▶1780年(安永9)

『都名所図会』(秋里籬島著)  
「菊水の井」と「菊潤」の流路を説明。

### ▶1791年(寛政3)

『花洛往古図 京の水』  
(江戸後期から見て500年前の京都の様子の復元を試みた絵図。)

「東」の字の下に「菊潤」「菊川」の地名が付され、東山から鴨川(手前の河川)に流れる様子が描かれる。

### ▶1799年(寛政11)

『都林泉名勝図会』  
(秋里籬島著)  
菊溪が流れる双林寺長喜庵の庭の絵



国際日本文化研究センター所蔵

### ▶1864年(元治元)

『花洛名勝図会 東山之部』  
(木村明啓(暁鐘成)編)  
宣長の歌を紹介

## 文人、庶民が好んだ桜、萩、紅葉、菊

菊溪の周囲、高台寺、双林寺、霊山(正法寺)などの付近は、春は桜、秋は秋や紅葉、菊の名所として知られました。『都林泉名勝図会』には、現在の円山音楽堂付近にあった双林寺塔頭「長喜庵」の借月峯(辰亮)の名とともに、境内の庭に「菊溪」が取り込まれて流れる様子



「菊水鉢」見送は深谷の  
黄菊、白菊が描かれた  
「深山菊水図綴織」

町、1956年(再建)は、能の演目「枕慈重(菊慈重)」の伝説がモチーフになっています。鉢の名称は、茶の湯に使われた町内の名水「菊水の井」に因んでつけられました。

また、都名所図会には、菊潤の流れは、安井境内(旧観勝寺)弁財天の前を通り建仁寺を過ぎて鴨川に入るとあります。菊やその下の谷水を不老長寿に結びつける考え方は、古代中国の神仙思想や、菊が薬用植物(生薬「菊花」)であった影響もあると考えられます。重陽の節句(旧暦9月9日)に菊酒(菊花酒)の杯を交わしたり、菊の夜露を綿をかぶせて集め、主に女性が顔や体を拭う日本独自の「着せ綿」「綿拭い」に見られる風習や菊のイメージは、宮中から武家や社寺を通じて徐々に庶民にも広がっていきました。



上賀茂神社の重陽の節句で授与される菊酒

## 近代以降の菊溪とキクタニギク

下流部の市街化だけでなく、上流部の環境も変化しました。東山は江戸期にはアカマツなどが育つ里山的な利用がされていたが、戦後の高度成長期に、古都保存法に基づく風致保護のため伐採が禁

止された円山公園でもしばらく開かれました。京都では室町時代から、また江戸時代は江戸、大坂、伊勢、肥後など全国で栽培ギクの育種が進みました。京都では江戸期中頃から円山、北野で菊会、花会などと呼ばれる品評会がよく開かれるようになりました。出品者は主として町人で、僧侶、武士も参加。安養寺など二帯の神社の宿坊は貸座敷を営み、池坊の花会、書画会なども開かれ、文化の発信地となっていました。

明治維新により、これら宿坊は廃されましたが、菊会は新たに開設された円山公園でもしばらく開かれました。京都では室町時代から、また江戸時代は江戸、大坂、伊勢、肥後など全国で栽培ギクの育種が進みました。京都では江戸期中頃から円山、北野で菊会、花会などと呼ばれる品評会がよく開かれるようになりました。出品者は主として町人で、僧侶、武士も参加。安養寺など二帯の神社の宿坊は貸座敷を営み、池坊の花会、書画会なども開かれ、文化の発信地となっていました。



『都林泉名勝図会』双林寺 長喜庵 (国際日本文化研究センター所蔵)

## キクタニギクを使った薫物づくり ~同志社大学で古代の香りを再現

同志社大学文化情報学部・福田智子教授が2023年度、薫物づくり連続ワークショップ「香りでつづる京の四季」を香老舗松栄堂の協力で開催しました。11月はキクの乾燥頭花を使う薫物「菊花(きっか)」を作りました。佐賀大学地域学歴史文化研究センター・田中圭子特命研究員監修のもと、平安時代の薫物指南書『薫集類抄』のレシピに依り、キク属植物研究を行う広島大学・高知大学で育てられたキクタニギクを用いて、古代の香りが再現されました。



**【食 用】** 新芽はゆでてお浸しに、葉や花は天ぷらにして食べました。  
**【民間薬】** 油に漬けて傷薬にしたので、アブラギクの別名もあります。この傷薬は、もとは長崎地方でキクタニギクの近縁種シマカンギク(鳥寒菊)を油漬にしたのが始まりとされます。のちにキクタニギクが江戸周辺で使われ、アブラギクと呼ばれましたが、牧野博士はシマカンギクとの混同を避けるため、アワコガネキクと名付けました。また、キク類の頭花は漢方で生薬(キクカ) 菊花として、降圧、消炎、利尿などに使われます。ただし、現在、日本薬局方で生薬キクカとして認められるのはシマカンギクと白く黄色の栽培ギクのみです。

**【香 料】** 花にはキラキラした香りがあり、精油をとり香料にしました。

シマカンギク(大分県)

## 生活で利用されたキクタニギク

キクタニギクは、京都では観賞用として珍重して栽培されましたが、生活で利用されることもありました。

止され、ガス・電気の普及で薪炭採取が行われなくなると、低利用(アングリーユース)や枯れにより、シイ・カシなど常緑の広葉樹が増え、ノギクが育つような明るい場所が減りました。キク科植物研究の第一人者、北村四郎博士は、1948(昭和23)年に、京都の人がキクタニギクと呼び栽培している植物は、八瀬や大原(左京区)では珍しくないが、菊溪では生えていないと記しています。東山での消失の時期はよくわかっていません。

※4…霊水が湧く場所を探す魏の文帝の勅使が、山奥で、菊の葉の露を飲み続けて七百歳もの長寿になった少年に出会う。  
※5…いくつかの香の粉末を蜜などで練り合わせた練香。菊花を含む六種(むくさ)の薫物が有名。

# 「地域絶滅」から再生へ——最新研究を味方に

## そもそも「キク」って?——イエギクとノギク

「キク」とは、キク科キク属のさまざまな花の色や形がある植物の総称ですが、私たちが普通に呼ぶ**いわゆるキク**とは、古代から育種されてきた**イエギク(栽培ギク、和菊、洋菊)**を指し、**ノギク(野生ギク)**とは区別します。

イエギクは唐代の中国から、日本の飛鳥時代に宮中に伝わったとされます。和歌に登場するのは、平安時代以降です。日本国内では中世以降、優れた栽培技術で独自の発展をとげました。

イエギクの起源は、古代中国の5~6世紀ころ、野生ギクであるシマカンギク(黄花)とチョウセンノギク(白~淡紅色花)の交雑で生じたものと考えられてきました。最近の遺伝学的研究(後述のNBRP広義キク属)では、シマカンギクや中国固有の菱葉菊が関与した中国起源の原始栽培ギクが日本に渡り、在来ノギクも含めた交雑により改良され、現代型の栽培ギクが成立したという2段階起源仮説が提唱されています。

### イエギク(栽培ギク)の例



大菊・厚物



大菊・管物



小菊・懸崖仕立て



古典菊・嵯峨菊

### ノギク(野生ギク)の例



リュウノウギク(京都市内)



キク属ではないが、キクに似るシオン属の野生植物(ヨメナ、ノコンギクなど)も「ノギク」と呼ぶことがあります。下写真はシオン属のシロヨメナ。(京都市内)

## 保全開始から幅広い層の結集へ

都市緑化協会は(特非)乙訓の**自然を守る会**希少植物保全グループ代表の**藤井肇さん**(京都府希少野生生物保全推進員)から、同会が市内西部の自生地で見守っているキクタニギクに由来する株を預かり、保全の必要性を伺ったことを契機として、2013年頃からキクタニギクの生息域外保全や普及啓発活動に本格的に取り組み始めました。また、将来的に東山の菊渓で復活を目指す場合の課題も考え、専門家の助言や、諸団体、行政の協力を得ながら活動を進めてきました。



藤井肇さん

京都発祥の環境マネジメントシステム・スタンダード「KES」の登録企業団体が参画する**KESエコロジカルネットワーク**では、2014年から危険分散を兼ねた栽培保全に取組んでいます(京の生きもの・文化協働再生プロジェクト認定制度)。現在の東山の大部分は、常緑広葉樹のシイ等が覆い、日照を好む野生ギクを見ることはできませんが、東山の周辺寺社、地域団体、企業、行政機関などが協働する「**京都伝統文化の森推進協議会**」は、森林の明るさを取り戻す林相改善事業の中で、2017年3月から、キクタニギクの苗木を植える試みを始めました。

また、都市緑化協会が菊溪に接する円山公園の指定管理者となり、(学)**京都文教学園**(幼稚園・大学院)、**京阪園芸(株)**との連携協定を基に、京都府立大学の専門家、学生、キクタニギクの利活用を目指す「都の福菊」、懸崖菊生産者の清水園芸など、幅広い団体・個人が再生に向け協力を始めています。

## 外来キクタニギクの問題

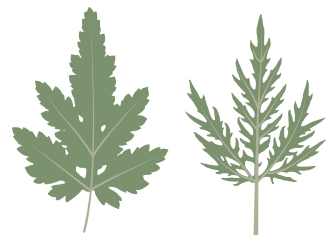
キクタニギクの国内分布は、もともと本州(東北太平洋側、関

## 皇居にしかない「カモメギク」はキクタニギクの細葉の変異型だった!

江戸末期、江戸では、キクタニギクに姿が似た、キクタニギクの葉の切れ込みをさらに細かくしたような独特の葉を持つ「カモメギク」という植物が観賞用に栽培されていました。カモメギクは明治時代以降は生体では見られなくなり、絶滅したと考えられていました。

キクタニギクは、学名上は先に登録されたカモメギクの変種あるいは品種と扱われ、中国大陸に分布するホソバアブラギクの変種とされることもありましたが、しかし、絶滅したと考えられていたカモメギクが、1986年に皇居内に現存しているのが見つかり、その後、形態や細胞学的な研究により、カモメギクはキクタニギクとかなり近縁で、両者はホソバアブラギクとは遠縁であること、形態的にはキクタニギクが基本種で、カモメギクはその変異型であることが推察されました。これらの見解はNBRP広義キク属の遺伝学的研究により裏付けがなされ、両者を合わせたキクタニギク(広義)の学名 *Chrysanthemum seticuspe* が使われるようになりました(引用・参考文献:中田・門田2014、谷口ら2014a、2014b)。

カモメギクは現在、上皇様のご配慮で、皇居東御苑の天守台近くに近縁種と交雑しないように植えられています。



キクタニギクの葉(左)とカモメギクの典型的な葉

東、信越、関西)、九州北部の一部の都府県に限られています。しかし、1990年代以降に、道路、河川での緑化工(吹付け工)で使われた外国産ヨモギ類の種子に混入した外来キクタニギクが、もともと自生していない15府県で見つかりました。

都市緑化協会は、この問題のバイオニクス、**富山県中央植物園**の中田政司園長(公社)日本植物園協会生物多様性委員会、外来種対策分科会長)に、2013年に市内西部の自生地を調べていただくなど、外来キクタニギクの侵入の可能性について注意を払っています。

生物多様性の保全は、多くの生物種があるという「種の多様性」だけでなく、同一の種であっても、生息地や個体の相違による多様性(遺伝的多様性)が重要とされます。外来キクタニギクは、在来キクタニギクの遺伝的多様性を失わせ、野生の在来近

※6……生息地の環境では絶滅する危険性がある生物を、緊急避難措置として生息地外の場所で保全すること

縁種との交雑も懸念されま  
す。実際に富山県では、外来  
キクタニギクと在来種リュ  
ウノウギクとの自然雑種が  
生じています。

この問題の調査は、次にご  
紹介する、中田園長もメン  
バーである、キク属遺伝資源  
研究チームからの協力にも  
繋がりました。



崖地のキクタニギクを調べる中田園長  
(2013年11月 京都市西部)

## 脚光を浴びるキクタニギク

### キク属「モデル生物」として

栽培ギクは現在の日本の切花生産の約40%を占め、海外への  
輸出も期待されることから、花卉産業では重要な植物です。  
広島大学、高知大学を中心とするナショナル・バイオリソース・  
プロジェクト(略称NBRPP)「NBRPP広義キク属」(代表者・  
草場信広島大学教授は、さまざまなキクの遺伝学的特性を分  
子レベルで解析しています。じつは、この研究の中で最も重要な  
植物がキクタニギクなのです。

キク属は、自己の個体の花粉では生殖が難しく(自家不和合  
性)、別の個体の花粉を受けると生殖しやすい「他殖性」が強い  
のが特徴です。研究グループが奈良県内で発見したキクタニギ  
クは、突然変異で自殖性(自家和合性)を持っており、自殖を繰  
り返すことで純系化したモデル系統がつけられました。この系  
統は広義キク属(近縁属のヨモギ属などを含む属)の遺伝子研  
究に適し、全ゲノムの塩基配列が決定されました。それをもと  
に、広義キク属植物の様々な遺伝学研究を進める基となるモデ  
ル生物となったのです。

例えば、多くのキクは短日条件(秋に日が短くなること)で花  
芽が形成されます。キクタニギクで得られた開花制御に関する  
知見が、栽培ギクの開花制御の理解に役立っています。

また、この遺伝学的解析は、多数あるキク属植物の分類上の  
位置付けにも役立っています。谷口研至・広島大学准教授(当  
時)を中心とする研究により東京の皇居でしか見られない「カモ

メギク」が、キクタニギクの変異型であったことが裏付けられた  
り(3ページ下コラム)、遺伝学的な相違の距離に基づいて、東ア  
ジアの近縁種を含めた種の系統図が作成されるなどの成果を  
上げています。

都市緑化協会が保全している京都市産のキクタニギクも、こ  
のプロジェクトの中で遺伝情報が解析され、データの蓄積に用い  
られています。

## 再生への新たな展開——実生繁殖

菊渓では市内自生地の系統を保全するため、これまでは挿し  
芽繁殖の株(クローン個体)だけを植栽しており、種子による繁  
殖(実生繁殖)はほぼ期待できません。植栽した場所の自然遷移  
により他の植物が繁茂すると、多くが消えていきます。

広島大学の研究グループでは、京都市内にわずかに残るキク  
タニギクからの種子で苗を育て、交雑した場合に種子を作るこ  
とができる2系統のペアを選別しました。この2系統が都市緑  
化協会に実生繁殖試験用に役立ててほしいと託され、2024  
年の3月に京都伝統文化の森推進協議会による植栽作業で菊  
渓に植えられました。この2系統が多くの種子をつけることが  
できれば、安定的に殖えることが期待されます。

一度はキクタニギクが絶えた「菊渓」の再生が、多くの人々の関  
心と、植物研究の力でかなえられるでしょうか。「京のみどり」で  
は今後もこの動きをお伝えします。



京都伝統文化の森推進協議会による植栽



から生2  
か美な  
学た能  
鳥れ可  
大さ殖  
広託繁  
系統の  
株

## キクタニギクは、どこで見られる？

現在残る自生地は山間部にあり、危険なためおすすめできません。

▶京都市産のキクタニギクは市内では、京都府立植物園(左京区)  
の植物生態園や日本新薬(株)山科植物資料館(山科区)で見  
ることができます。山科植物資料館の見学には事前予約が必要です。

▶また、都市緑化協会は例年11月  
の花期に、市内で特別展示を行  
います。梅小路公園いのちの森水  
田付近にも数株あります。



京都府立植物園



山科植物資料館

## 開催予定イベント紹介

11月2日(土)~17日(日)  
名勝円山公園 京都ゆかりの菊展示  
懸崖菊(小菊)、キクタニギクなどを、  
円山公園管理事務所前に展示します。  
期間中、(学)京都文教学園などの  
協力で、煎茶でおもてなしの日を  
設けます。  
(詳細は円山公園 HP でお知らせします)



### 【引用・参考文献】

- 京都府(2015)、「京都府レッドデータブック2015」2 野生植物・菌類編  
北村四郎(1948)、菊・平凡社
- 北村四郎・村田源(2006)、「原色日本植物図鑑 草本編1 合弁花類、保  
育社(改訂69刷)」
- 中田武司(2017)、「海を渡って来た優雅な花卉 第1節「さく」」「和漢  
古典植物名精解、和泉書院(2017)所収」p.p.732-768
- 園芸植物大事典(2) 小学館(1994年)
- 中田政司(2013)、「栽培菊と外来ギクによる日本産野生ギクの遺伝的  
汚染」山口裕文編著「栽培植物の自然史」」「北海道大学出版会  
(2013)所収」p.p.209-212
- 中田政司・門田裕一(2014)、「皇居にのみ現存する園芸植物カモメギ  
クの細胞学的観察、国立科学博物館専報(49)」、p.p.5-10
- 谷口研至・草場信・中田政司・門田裕一(2014a)、「カモメギクの葉形  
と頭花はキクタニギクの変異に含まれる、国立科学博物館専報(49)、  
p.p.11-15
- 谷口研至・本原宏志郎・草場信・中田政司(2014b)、「NCEDD3 a  
遺伝子からみたカモメギクとキクタニギクの系統関係、国立科学博物  
館専報(49)」、p.p.17-22
- 竹村俊則(1981)、「昭和都名所図会」 洛東(上)、巖々堂
- 本居宣長、享和元年上京日記「久次保正編」本居宣長全集「第十六巻、筑摩  
書房(1974)所収」
- 森谷勉久(1976)、「洛外発見、江戸時代図誌2 京都」、筑摩書房
- Hirakawa, H. et al.(2019), De novo whole-genome assembly in  
Chrysanthemum seticusp, a model species of Chrysanthem-  
ums, and its application to genetic and gene discovery analy-  
sis. DNA Research, dsy048